

# 古民家の教え

古民家は家族のさまざまな記憶を宿している。古いものには、いろいろな思い出がしみついている。使い捨て商品の知らない歳月の置き土産。記憶や思い出のないものは……。

ドイツ文学者・エッセイスト

## 池内 紀

●いけうち・おさむ 1940年兵庫県生まれ。近著に『東京ひとり散歩』（中公新書）、『日本風景論』（角川選書）、『祭りの季節』（みすず書房）、『文学フシギ帖—日本の文学百年を読む』（岩波新書）、『ことばの哲学 関口存男のこと』（青土社）などがある。

### 棟梁たちの工法

建築学では「古民家」といったりする。日本固有の木造家屋で、「伝統建築」ともいうようだ。友人の建築家のお伴をして、二度ばかり解体現場を見せてもらった。一度は移築のケース、二度目は取り壊しだった。移築は工務店の仕事だったが、取り壊しは「解体屋」と呼ばれる業者だった。同じ現場であっても作業がまるきりちがうことを初めて知った。

床と天井がはがされると、みごとな木組みがあらわれた。二度とも築後二百年ちかい建物だったが、骨組み、部材ともガッシリしていてたくましい。礎石に柱がのっているだけで、それが二階まで貫いている。「石場立て」また「通し柱」といって、床下の通気をよくして材木の寿命をのばすとともに、地震のとき、揺れをかわす「免震効果」があるそうだ。地震国日本の棟梁たちがあみ出した工法である。天井の木組みはタテとヨコだけで筋違いにあたるナメは一本もなし。筋違いが入るほうが頑丈のように

思うのだが、地震になると、それが突き上げるかたちで木組みを壊してしまう。タテヨコだと、しなったりたわんだりして揺れをしのぐ。移築のケースは新潟県のこと、二度にわたる中越地震にもピクともしななかった。

壁はまっ黒。歳月が染めつけたのではなく、煤すすをまぜた黒漆喰である。漆喰は火事に強いが湿気を含むと剝落しやすい欠点がある。煤をまじえて油分を加えると撥水性が生じる。明治になって黒漆喰が流行した。築後二百年の途中に壁を塗りかえたことが判明した。

「おや、何だろう?」  
鴨居を懐中電灯で照らしていると、薄いレリーフ状のものがチラリと見えた。とっくりが横になったかたちで、わきにお猪口ちよこが添えてある。大工が遊んだという。木材に傷があると補修するわけだが、埋め木にちよつとした細工をほどこす。ほとんど目につかないところにも飾りを忘れない。

梁の一つは曲がっていたが、もともと曲がっている木を使った。雪国の木は雪の重みで根かたが湾曲する。厳しい冬に鍛えられて強度が抜群で、梁になって屋根の重みを耐えてくれる。形が火縄銃の台尻に似ている

ことから鉄砲梁といって、雪国の工法に採用された。

あれこれ勉強したのは移築に際してであって、取り壊しのときは骨組みがあらわれると、友人はすぐさま写真にとりかかった。シロウトの目にはただなのでデコボコだが、プロには鉋かんや手斧ちやうなの削りぐあい、木口の組み方がひと目でわかる。欄間らんまの透かし彫りならこちらにもわかるので、しげしげと眺めていた。一枚板に小波のうねりと波がしらが彫り抜いてある。

「センセイたちはいいなア」  
解体屋の親父がなげなげな声でいった。いいとこだけを見てすませるが、こちらは惜しいと思ってもぶつ壊さなくてはならない——。その言葉どおり、やがて戦車のようなクレーン車クレーンが乗りこんできて、巨大なカニの鉋のようなツメを振るい、あつというまに木組みと壁をガレキにかえた。

### 門前町の下落

一九七〇年代に入ったあたりからだった。「所得倍増」をスローガンに日本経済が戦後最初の高度成長へと走りこんだ。旧来のもの、伝統的なものは一切合財、